

# 本尊論の再検討

## 出席者

日蓮宗現代宗教研究所々長	立正大学 教授	茂田井	教亨
日蓮宗現代宗教研究所顧問	立正大学 教授	執行	海秀
日蓮宗現代宗教研究所顧問	身延山短期大学 教授	室住	一妙
立正大学 教授		浅井	円道
日蓮宗現代宗教研究所研究員	立正大学 教授	勝呂	信静
日蓮宗現代宗教研究所研究員	立正大学 助教授	渡辺	宝陽
日蓮宗現代宗教研究所研究部主任		近江	幸正

日蓮教団では古来より本尊論が論議されてきましたが、ことに最近、本尊の奉安形式をめぐって論議が行なわれました。これはもちろん個人の間にわたったわけですが、教団の立場からみると、この論議がいったいいかなる意味

と問題をもつのが、宗門人に確認される必要があると思

います。日蓮宗現代宗教研究所では、そうした意で本尊論の論点の検討を行なってきたわけですが、その結果、本尊論が本

尊の形式の面を中心に議論することはあまり意味がないのではないか。むしろ、信仰者として本尊をどのようにうけとめるかという信仰の根本から本尊も求めなければならぬと考えたわけです。

そこで、本日は諸先生にお集りいただき、そういう根本的立脚点にかえて、いわゆる「本尊問題」について再検討していただきたいと思ひます。

もう一言加えますと、本尊は信仰の対象であることを明確に規定して論じる必要がありますが、その上で、本尊について論議する場合、二つの立場があるのではないかと思ひます。つまり ①同一の信仰に立つ教団人としての立場から、教団人として本尊をこのように帰依して行くのだという根本的な一如の立場と、一方では、②信仰の対象である本尊がどのような、実体と形式とをもつかを形而上学的に追究して行く宗学からの立場と、この二つがあると思ひます。もちろん、②の宗学の立場も、①の教団の立脚点を基本とすることはいうまでもありませんが、しかし、どこまでも論理的な追究をゆるがせにしないわけです。

ところがこの両者の立脚点を混乱して論議が行われれば混乱が起つてしまふ。ややもすれば、そのような混乱が、本尊論議にあつたのではないでしようか。そんなところか

ら、お話をはじめていただきたいと思ひます。

### 本尊論の意義

【B】 私も「本尊」を問題とするとき、立場とか論点を明確にしておくべきだと考える。学問上における本尊の問題のとり扱いと宗門行政の立場からとはとり扱いが違うと思う。学問上からは理論的な進歩が許されるが、それに対して教団の立場では伝統的解釈との調和が要請されなければならぬのではないか。もう一つは、本尊の成立を考へる場合、宗祖の思想の展開のなかで、本尊が形成され成立して行く段階と、その完成の上で門下がそれを受容して行った場合とは、区別して考へなければならぬのではないかと考える。

【C】 キリスト教が神の観念によってその宗教の性格を明確にしているように、日蓮宗の本尊は日蓮宗の宗教的性格をはつきりするものでなければならぬ。つまり、本尊を考へるとき、学問上での論議がなされる以前に、宗教上の問題として受けとる背景がなければならぬと思う。ところが、一般に仏教ではそうした受けとり方が、受けとり手にも、論ずる側にも欠けているのではなからうか。そのため、学説上の論議と、宗教的な受けとり方の問題とが

混乱してしまうところがあるのではなからうか。

【D】 いまの意見は、本尊論を考えるとき、教団・宗学・教義学の三面があることを考慮にいれる必要があると受けとってよいだろうか。Bさんが「本尊が宗祖において形成されて行く段階と、門下がそれを受容して行く段階とを区別して考えろ」というのはどんな意味か。

【B】 論点をはっきりさせておくことは、あとで具体的に本尊問題を論議するとき、その論拠についての意義づけの仕方やその相違にかかわってくると思う。端的にいつて、私は日蓮聖人の本尊は日蓮聖人の思想体系の頂点としてのシンボルであると思う。本尊は信仰の対象であると同時に、日蓮聖人の全思想を内含しているものであると思う。ところが、その後の教団では、われわれ信徒が礼拝の対象とした場合どういう意味をもつかという実際の論点加わってきたと思う。専門的な立場からではないけれども、恐らく、本尊の形式が信仰の対象として適当であるかどうかというようなことは、日蓮聖人御自身においてはあまり問題にならなかつたのではないか。ところが、その後門弟の立場から、かなりそうした要素が入って来たのではないかと思う。

【D】 そうだと思えます。宗祖においては、現在われわれ

れ教団所屬の者が本尊を拝するのは違つて、聖人自身の思想体系の頂点に本尊があることを認識する必要があるということです。それは、重要な指摘である。

【B】 具体的にいえば、例えば仏像本尊の方が礼拝の対象として適しているというのは現在の教団において言われることであつて、それを聖人在世まで溯らせて考えることが妥当かどうか疑問がある。

【E】 今までのお話で、本尊が学問上、行政上、宗教上との三の観点から別個に論じられなければならないというのはどういう意味なのか。つまり、本尊論とは、①本尊がなぜ礼拝の対象たりうるかの問題、②本尊の魁体についての問題、③本尊の形式の問題との三点から従来行われてきたと考えるが、そういう本質的な論議と教団の立場からの論議とはどう違ふのか。教団の上からということとは本尊の形式論の問題と考へてよいのか。

【F】 教団的には、教団として一定の本尊が決められていなければならないということではないだろうか。勿論、宗学は信仰の学であるから、宗学上、そうした意味での本尊の魁体・形式についての論争がたかかわされてもよい分野があり得ると思う。ところが、教団としての立場と、宗学的な緻密な論議とがごちゃごちゃになって受けとられ

たところに、混乱があったのではないか。

【E】 教団として奠定する本尊を確立し、その上で、信仰上と教学上の本尊がどう止揚されるかを考えるのが本質的な本尊論であると考えてよいだろうか。

【G】 今までのお話のように、宗学上と教団としてとの二面から、或いは宗教学上と学問上という二面から論じなければいけないということだが、宗教学上というのは、当然教団の立場から考える場合に前提となるもので、要するに、従来の本尊論が、ややもすれば、教団というものをふまえないで、それは分ったものというようにして、省略されて論じられなかったのであろうが、当然、教団というものを前提にしなければいけないと思う。その点に、我々の反省しなければならぬ点があるように思われる。

しかし、教団というものは、単に空間的にあるものではなく、時間的な伝統があり、歴史をもっている。その歴史の中に育ってきた教団の中に、定形の本尊があるとすれば、教師・信徒の間に本尊とはこういうものだという、暗黙のうち互いに約束し是認していたものがある筈だ。ところが、それには本尊がどういう概念をもつか、教義的内容をもつかという内容的な点で宗学上論議されてきて、たまたまそうした観念的・理念的な問題が形式論と結びついて、

本尊論の問題が起きてきたのだと思う。

その前に一体、日蓮教団というものは何を信じ、何処に立っているかが問われなければならない。本尊が問題とされる前に、何故一尊四士なり、曼荼羅なりを本尊としなければならなかったのかという問題が問われなければならない。それなくして形式論をやっていたのでは単なる偶像論になってしまう。それを一念三千という本質論と結びつけて、教団的・歴史的なものをすべて合理化しようとしたのが私の本尊論の意図であった。本尊を論ずる場合、我々は宗祖の弟子として被投的な立場に立っているが、一方自ら日蓮の弟子・檀越となったという企投的な意味ももっていないなければならない。そうすると、宗祖が一体何を求めて、何を得られたのかということが問われなければならない。教団人としては宗祖の求めたものをそのままに求めなければいけないのではないか。それが護教的といわれるのである。その枠内で宗学が論ぜられるから、ある意味で宗学は学問 *Wissenschaft* ではないという批判も甘んじて受けなければならないのではないかと思う。

### 本尊論の問題点

【H】 従来の本尊論は大きく分けると、教観本尊・人

法本尊という視点から論じられている。しかし、これを正しい意味で見易いようにすると、曼荼羅の中央の題目だけでよいという考え方と十界羅列のすべてを具足していなければいけないという考え方があったと思われる。後者の場合は一塔兩尊をはじめとする十界を具足していなければならぬと考えられている。これは文字で顯わしても佛像で顯わしても同じ意味で、単に抽象か具象かの相違と考えられている。高橋智遍氏などは、これを顯わすにはどうしたらよいか、六万恒河沙をどうたてるか、三十二相をどう顯すか、そして十界すべてをどう顯したらよいかということを考えている。この場合、十界全体が南無妙法蓮華經に統一されていると見るのはよいが、要するに能具の南無妙法蓮華經だけでよいか、或は所具の十界も同時に表現されていなければならないかという二つの説がある。

そして、中心をはっきりさせるためには一塔兩尊だけでよいという説もあり、また一塔兩尊四士がよいという説と、さらに、望月歎厚先生のお考えのように、それをもっと簡約にして一尊四士でよいという説とがある。このように、本尊をどううけとるかは一応おいてみると、形の上でも以上のように主張を分類できる。

それでは、十界を表現していないと本尊ではないのか。つ

まり、略式本尊は本尊ではないのかというと、そうは云えないのであって、聖人の曼荼羅の中には表現の上に、広略・要とも見るべき、いろいろなものがある。

要は、首題をどう受けとるかが問題である。曼荼羅を本尊とするという点では日蓮教団がほとんど共通するが、それをどういう風に信じるかが問題である。

つまり、本尊としての南無妙法蓮華經は一たい何を表わすかということ、中には宇宙の絶対神であるとか、或いは自己自身の当体、または、日蓮聖人であるなど、種々雑多の説がある。

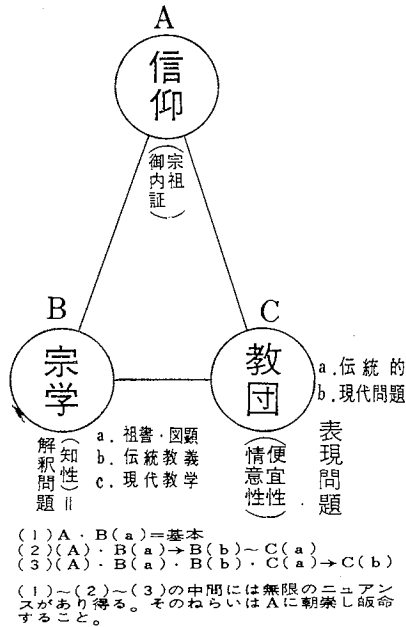
曼荼羅をどう解釈し信じるかが問題である。形相の上から行くと釈尊は余り大きな比重はもたない。すると中央の首題は何であるのか。これについて、古来から真言に近い解釈がなされている。十界は一つ一つの機に應じてあらわれてくるところの一門の本尊で、南無妙法蓮華經はそれぞれの機に固定されない普門の本尊・絶対者であるというような解釈はかなり早くから本尊相伝類のなかにあらわれてくると思う。

【C】 普門の本尊が法本尊的な考え方なのですね。

【H】 そうです。法本尊的な考え方に基づくものです。

【D】 今の本尊の問題を図式に分類してみると、理解し

易いと思う。



となるが、教団的に考えると学者や信仰者の感情や意欲によった表現がそのなかに含まれるのではないか。本仏というものを考えると、仏本尊・法本尊・人法不二という三つが考えられる。そして、その場合、法が問題となるが、その法にも、教法と釈尊が証悟された法と、理法との三がある。だから、己心本尊は大日如来的だというような表現は混乱を延長させると思う。日蓮聖人御自身も観心本尊といわれているのだから、己心本尊は否定できないと思う。

【H】 しかし、己心本尊といえども、題目を信ずるとこ

ろに生れるのであって、曼荼羅の署名(花押)についても、御本尊と一如したいという帰依の感情のところ、自分の署名(花押)をする必然性があつたわけだと思ふ。

【C】 それは、宗祖の位置づけの問題で、宗祖に面奉して内観をうるのか、直接妙法によって得るのかということでもあるのではないか。

【H】 とも角、富士派の日蓮本仏論は、一致派の己心本尊的解釈に対してうちだされてきたと思うが、そういう意味では、日蓮聖人は釈迦本尊であつたと思う。そして日蓮聖人は妙法蓮華経は釈迦牟尼仏の悟の世界と受領された。聖人は妙法蓮華経をたてた釈尊を信するのであって、道元のように、どの釈尊でもよいというのではない。

【C】 そこで、『本尊問答抄』のように、いわば所表の法があつて能表の釈尊があるという風に見てしまふか、今のお話のように、釈尊をはっきり規定するためにそういうことをいっておられるのか、その辺の理解によつても、観方が相当変わってくると思う。

【H】 Dさんのお話のように南無妙法蓮華経は日蓮聖人の悟りの世界であるというのと、日蓮聖人なくして南無妙法蓮華経はないというのと同じようなことになるのではないか。

【F】 室町期の本尊相伝が中古天台と関係があるといわれますが、その点お話し願いたい。

【H】 あまり歴史的なことばかり話していると廻り道になってしまいが、簡単に代表的なものを挙げると、三位日順師の『心底抄』によると、今の一致派の考え方とほぼ同じで、南無妙法蓮華経は総、十界は別、そして、両者が具足していなければならぬと説く。一方、近代の学匠綱要日尊師は、われわれは襤褸の天子（おむつにつつまれた天子）だから、自覚しようとしなくても、本化の四菩薩が守ってくれるという。

しかし、これは観心の世界というべきで、信仰の世界ではない。この点、誤って受けとられる危険性がある。

【D】 そこは平面的解釈ではいけないと思う。信仰の境地であるからだ。たとえ、一仏本尊でも曼荼羅本尊でも、信仰の境地から論じなければいけないので、そこに、清水龍山先生の「本尊は論ずべからず」という意見も生ずると考えなければならぬ。

### 久遠本仏論の性格

【B】 私考えますのに、久遠本仏というのは非常に分りにくい面をもっているのではないか。つまり、仏教でいう

本門・迹門の観念は極めて哲学的であるから、大衆は容易に理解できないと思う。キリスト教の神はキリストに神と考えると非常に人格的でよくわかる。アマダ仏の場合は本願によって性格が明らかにされる。それに対して、久遠本仏を一口に永遠の仏などというが、永遠の仏ということは大日如来でもアマダ仏でも同じであるから、これでは具体的にない。

法華経を見れば久遠実成の釈迦牟尼仏が説き明かされるがそれを具体化するために、本尊の哲学的基礎づけが必要となるのであろうが、一般の民衆に分りにくい。それに比べると、法華経そのものが靈験あらたかなものだという方が実感的なものではないだろうか。そういう条件が本尊論には加味されているのではないだろうか。

【D】 たしかに、信仰感情の上からはそういうえるが、ここでは本尊論は問題にしないでよいのではないか。信仰者としては釈尊一仏でも至心にお題目を唱えればよいのではないか。ただ、学者が教義学的に論ずる場合は五重相対まで論じる必要がある。

【B】 論点が違ふと思うが、本尊を対象として考えた場合、衆生にとって身近なものかどうかということです。法華経寿量品には、我々は顛倒の衆生であるから本仏を見る

ことができないといっているが、他方では凡夫がこの経の一句一偈でも受持すれば成仏するということが、経文にはたびたび説かれている。そうすると、この法華経のいう所に従った方が分りやすいのではないかとも思うわけです。

【E】 歴史的に考えると、平安仏教の特色は即身成仏にあり、これに対し鎌倉仏教の特色は仏の発見にあると思う。その見方からすれば、日蓮聖人においては法華経の仏の発見にあると見る方が至当ではないかと思う。

【C】 日蓮聖人は主師親の三徳ということを強調されるが、その背後には今のお話にてきた、仏を非常に人格的にとらえているということがあるのではないか。もちろん底に普遍的な仏性という大乘仏教通有の形而上学的なものをふまえた上で、その仏性を実現するためには釈尊の人格が強調される必要があったと思う。平安仏教は普遍的な仏性の強調までで、さらに仏の人格性が強調されてくるところに、平安から鎌倉への歴史の流れがあるのではないか。その点、Hさんが木像仏を強調される一つの理由があると思われるが、いかがでしょうか。

【G】 Dさんが先程いわれたように、たしかに日蓮聖人には観心本尊抄の世界があり、己心本仏が強調されているけれども、一方では聖人の御遺文を通じて、一体仏が強調

されているので、その点ではたしかに人格的にとらえられているといえよう。ところが一方ではかなり主体的な、自己の仏というようなことが強調される。むしろ主要御書のかなには主体的な面が強く表現されているともいえる。

なぜ、このような二つのことが見られるのだろうか。私はこれをとく一つの鍵として、遺文の与えられた相手方の性格によると思う。つまり、一般信者に対しては、仏本尊的な性格が強調されるが、一方、義学的な面ですぐれている例えば、天台、密教的な教養のある富木氏や太田氏などに与えられる場合にはかなり己心本尊的な、法本尊的な性格が強調されていると思う、仏本尊的な書き方をされているのは、佐前では南条氏に与えられた、南条兵衛七郎殿御書であるが、いうまでもなく南条氏は念仏の信者である。善無畏三藏抄は道善房に与えられたもので、やはり念仏信仰者で、阿弥陀仏を礼拝していた。

それに対し、富木氏や浄願、義浄などの義学者に対しては、あくまで法本尊的な観心本尊的なことをいわれるのである。

このように機に対して違った表現の変化をされているが一見矛盾しているようにも見えるが私はこれは決して矛盾していないと思う。というのは聖人の主著である観心本尊



抄において一方では地涌の四士が拜まれる四士もあれば、拜む四士もあれば、或いは人天の大導師とでていく四士もある、というようになり変化が見られる。というように、宗祖は、かなり複雑な変化のある説明をされている。そこには、ある意味では思想性の深さがあるともいえ、ある意味では整理されていないということもできる。

【C】 仏教徒はすべて成仏を目的としてねがっているわけだが、その保証が必要なのである。だから己心本尊といっても、やはりそれは久遠実成の本仏によって保証されるものでなければならぬ。だから、己心本尊という理的なものはあっても、結局は久遠実成の釈尊への絶対的帰依がそこに必要とされるのではないか。つまり、成仏が潜在的にあるだけでは意味がないのであって、信仰の客体としての釈迦仏が厳然として存在しなければならぬのではないか。われ／＼凡夫の側から見ればそういうように理解しなければならぬ。

【G】 私見によれば、客体仏として本尊と己心の本尊とはやはり両方とも認められるのではないかと思う。私はやはり己心本尊が、宗祖の教学において重要なモメントをもっていると思う。それがないと、われ／＼が題目を唱えていく受持の必然性の理論が弱くなると思う。

【H】 たしかに、歴史的に見ても客体仏と己心本尊の二つの考え方があつたわけで、どちらも欠けてはならないと思う。それを統一するものとして、下種思想が必要だと私は思っている。それでないと二つの統一はできないのではないかと考えているわけです。両方の表現をどう調整するかが先師の苦心されたところだと思ふ。

【G】 先程の話にでた報恩抄と本尊問答抄も、我々が考えると矛盾だが、宗祖においては矛盾はなかったのだ。報恩抄はいうまでもなく旧師道善房に私の行じたところをよく知ってほしいというので、釈迦仏をたてられた。それに対して、その意味はこれこれだという教学的説明が浄願房らになされたといえよう。

【H】 一般の信仰形態からすれば、日蓮聖人は釈迦牟尼仏を本尊とし、御自身を本化の菩薩の使としている門弟の立場をとっていると思う。法はあつても、仏の救済によるのではないだろうか。

【C】 優陀那日輝師がマンガラを仏本尊と理解しているようですが、それはどういう内容なのですか。我々の今考えている「人・法」の考え方は違うように思われるが。

【F】 藤田文哲『本尊教觀史論』吉田素恩『人法本尊法体史論』等によると、一致した理解として、本尊論史は元

政上人を境として前後に大きく二分されるとされている。

すなわち、室町期以来の本尊論は本尊相伝を中心にして考えてきたが、元政上人が深草に釈尊一体仏を造立されてから、曼荼羅と釈尊一体仏とを統一的に理解しなければならぬ必要性がでてきた。そこで、優陀那日輝師は両者を止揚して曼荼羅の中尊は本仏であるということをいわれてきたのだと思う。

【D】 元政上人以前に釈尊を造立した人はだれなのか。

【H】 信仰的、学説的に釈尊一体仏を重んじられたのはやはり元政上人あたりからだと思う。檀林などでは釈尊一体仏をおまつりしています。脇士はなかった。

【D】 そうすると、深草の瑞光寺に釈尊一体仏をあのよに勧請されたのは、元政上人がはじめてだと考えてよいのか。

【H】 そう考えてもよいのではないかと思いますが…。

【D】 その事情は時代思想などの方から、どう考えられるか。

【H】 しかし、お釈迦さまといっても、法華経を胎内に入れているわけです。あたかも、法華経が釈尊の五臓六腑になるわけです。

【D】 そうすると、釈尊をなまなましく拝されようとき

れたと考えていいわけです。形式よりも、もっと根本的な信仰の態度を正視しなければならぬと思う。

【G】 それは元政上人一人には分るけれども、他の人にはそれを聞かなければ分らない。

【D】 同時代の中正日護師も丈六仏を造立されているがそうすると一つの時代思想と考えてもよいのではないかと。

【H】 やはり説教者は仏本尊論であったのではないかと。法本尊では信徒が理屈ばかりいうようになって、素直な態度が失われるからではなからうか。

【D】 話とはぶが、玉沢の祖像の背後に一尊四士が描かれているが、あれはいつの頃できたのか。

【H】 鎌倉末期以後のもので、聖人在世ではない。

【D】 中山の祐師目録に見られるのは一尊四士か。

【H】 あれは最初三尊四士に造られ、後に一塔両尊四士にされたと伝えられている。

【G】 釈尊一体仏造立の史実は富木氏（真閑釈迦仏造立事）四糸氏（日眼女釈迦仏供養事）にあります。身延で聖人御自身も釈迦仏を本尊とされている（忘持経事）。

【H】 結局、観心本尊というのは信仰の境地であって、一般信徒がこうした理論を生半可にふり廻すことは信仰上よろしくないことではないのか。

【C】 あやまった信仰になり易いということです。

【D】 わたしの所では上にお曼荼羅、その下にお釈迦様を勧請しているが、何も分らないような人には釈尊を説明し、少し理論的な人にはお曼荼羅が釈尊の神かみしいをあらわしているのだというように説明している。これは実際問題として、信仰感情の上からいっても止むを得ないのではあるまいか。

【H】 仏教一般では釈迦仏中心ということがあまり確立されていない。そこが問題になると思う。

【C】 中国における寺院様式を調べると、大体釈尊が中心的位置に祀られているようである。釈尊中心でないのは日本における特徴ではないか。

曼荼羅はもともと壇の意味で敷きまんだらも布に書いて壇にしくものだったが、それが後には日蓮聖人のお書きになられたような形態の前身が出来て来たのではないかと思われる。

【D】 やはり、真言の曼荼羅でも、紙に書いて拜するということのような形式があったのではないだろうか。

【G】 大体、鎌倉時代には、真言だけでなく、華嚴の樹尾明恵上人が、中央に「大方広仏……」というようなことを書いた曼荼羅風のものがあったし、親鸞聖人にも「雨無尽

十方無碍光如来」を紙に書いたものがあり、このような形式が鎌倉時代に共通してあったということがいえるのではなからうか。

### 本尊論争の回顧と久遠本仏論

【F】 今までの皆さんの御意見によると形式としては異った表現であっても意味性としては大体一致したもののようですが、それにもかかわらず、何故それでは本尊論が問題になったかが問われるだろうと思う。その点についてお話をお願いしたい。

【C】 本尊論というと非常に広い範囲になってしまうが、最近行われた本尊論争というものの、具体的には高佐師などがあげられるが、それが何故行われ、問題となったのかということでお話しねがえればよいのではないか。

【B】 私どもが子どもの頃は曼荼羅が本尊であると教えられていた。ところが、十数年前、曼荼羅本尊が正統な本尊ではない。一尊四士こそ本尊であるということが唱えはじめられ、それに対する反撃が行われてきたという風に理解しているが、一尊四士論が唱えだされてきたのはどういう理由か、おぼろげには意図が分るような気がするが、明確であるとはいえない。優陀那日輝師の修正であるとは聞

いたが優陀那宗学をよく知らないの……。ただ優陀那宗学がどちらかといえば、観心本尊ということで、それに対する修正がどういふ意味をもつのだろうか。

【D】 日蓮宗説本が問題になった最初で、それに対する高佐師の反撃が行われたわけですね。

【G】 日蓮宗説本編集の際、現実的要請もあり、どうも宗門的に本尊が一定の形式をととのえていないのはまずいというので、統一的な方向へもって行きたい。それには一尊四土が妥当だということで一尊四土が望ましいという提案が出されたわけです。文章表現の上では鈴木先生が論じられただけでも、理論づけは望月先生・執行先生が行われた。

これに対し、高佐師・高橋氏が反撃を加えてきた。竹田師はまえまえから望月先生の一尊四土論に賛成しており、曼荼羅否定論者なので、我意を得たとばかりに賛成した。小林是恭先生はこの線からはちょっとはずれると思う。宗門との関連があったとはいえ、やはり、純粹宗学理論から一尊四土論が望月先生、執行先生によって提示されたのである。それで、望月・執行両先生が一組になるわけだが、それに対し、勿論両者に相違はあるが、曼荼羅を強調するという点で、高佐師・高橋氏が一組になる。

【D】 高木師の主張はどうなのか。

【H】 高木師は後になる。曼荼羅本尊だが、むしろ、宇宙法界という理解が強いのではなからうか。

【B】 その前の時代にはどういふ論争があったのか。

【D】 田中・本多・田辺・清水竜山等の諸師は人法論の問題だ。

【C】 それに、天皇本尊論などがでてくる。

【B】 そうすると、具体的にどういふ形がいいかということまではいっていないわけですね。

【G】 本多師は曼荼羅本尊を説明しながら、しかも、結論は釈迦本尊一尊にもって行くわけです。だから、清水竜山師は、本多師を評して、曼荼羅を解説しているところは非常にすばらしい、我意を得ているが結論的には問題があるといっている。むしろ、その意味からすれば、田辺善知師が什門の伝統をうけているというわけです。曼荼羅論においては、田中・清水・山川師らはほぼ共通した見解に立っている。

【H】 田辺師の曼荼羅論は、已心本尊論に近い。ところが、田中・山川両氏は清水師よりむしろ仏に近く人本尊的で、妙法蓮華経は釈迦牟尼本尊をあらわすので、我々をあらわすのではないと一応規定する。

【G】 清水師は自ら優陀那日輝師の祖述者といわれ、已

心本尊的色彩があるが、父子相関の論理をもって、多少そこから脱却しようとしている。

【H】 己心論争で、清水師は己心は我々の己心であるというのに対し、山川氏は釈迦牟尼仏の己心であるというところにもその相違がうかがえる。

【G】 あの論争は本尊抄己心問題で、本尊問題ではなかったですね。

【F】 いわば、本多・田辺師が両極端で、清水師が両者の中間に立って統一しようとしている。

【G】 最近の本尊論についてみると、ともかく現実的な要請があったということは事実ですけれども、望月、執行両先生は、常日頃、信行の対象としては、釈尊を中心にして曼荼羅は三秘總在であると信仰的にうけとっておられるわけです。

【D】 私は、むしろ、曼荼羅が釈尊の人格をあらわしたものと受けとり、それは法界の意味ということにもなる。

【G】 意味づけということからすれば、釈尊に四士をそえて、久遠実成をあらわすことができる。

【D】 だから、矛盾があるわけではない。

【G】 質的な問題の相違ではない。

【C】 「日蓮宗読本」では、形式にもふれて、曼荼羅を

否定するわけではないが、宗祖在世時代にも、一尊造立の事実があるのだから、むしろ、眼前の迷惑を生じやすい曼荼羅よりも、一尊四士の方がわかりやすいのではないかと、また世界的にいっても文字曼荼羅よりも釈迦仏造立の方がわかりがいい、という風にも考えられたのではないかと思う。

【F】 望月先生のお説では、木像造立にあたって曼荼羅をそのまま木像化することが果して宗祖の本意に適うか。むしろ、木造の場合は、一尊四士の方が適切ではないかという主張が強かったように思う。

【G】 望月先生は曼荼羅の上段、つまり中尊、釈迦多宝、上行等四菩薩のところ为本尊であって、文殊、普賢以下すべてがただちに本尊になるのではないのだというのだ。

【F】 田辺師等の場合は、中尊が理法としてとらえられ汎神論的な感じがあったのに対し、望月先生は中尊をあくまで教法を中心としてとらえようとされたのではないかと。

【D】 高橋氏らは、曼荼羅をそれほど重んじないことに對する批判であって、一尊四士も略式としては認めるけれども、曼荼羅が正意であるというのだ。

【H】 高橋氏は曼荼羅が正意で、一尊四士はその部分をとりだしてきたものにすぎないというが、それは逆で、本

尊としては曼荼羅に一尊四士の基本をのべている基礎であって、広、略論で論ずることは正しくない。

【C】 高佐氏の場合、久遠実成を非常に汎神論的な認め方をしようとするから、どうしてもこうなる。

【H】 要するに汎神論であるし、我々の生命の本体だという、我々の生れてきた源であり、また帰るところである。

【C】 つきつめていくと、人格的な本仏というものを認めない。

【H】 強いて立てれば、天皇にでも何んでもなることができるものとなる。

【F】 ですから、一般には本尊論が曼荼羅か一尊四士かという風に考えられているが、実際には曼荼羅理解が違うのではないか。つまり、曼荼羅を汎神論的に拝するか、人格的に拝するかの違いが重要ではないか。

【H】 鎌倉仏教の祖師たちは、汎神論的なものを否定はしないが一応本尊の基盤と見做している。

【G】 魁体ということからいうと、たしかに鎌倉仏教は本仏中心である。

【H】 日蓮聖人においては本門の本尊と本門の題目が一つになっているのではないか、それを客観化したときを本

尊といい、受持するときを題目というのではないか。

【G】 私はそこに質的統一があると思う。

【D】 だから、山でもどこでもお題目を唱えるとき、そこに本尊があるのだと思う。

【H】 ただ実際問題として、そういう考え方をおしすずめて行くと、祖山中心の信仰というきちっとした信仰がくずれれる。

【B】 今の、題目だけが本尊だという考え方とそうでない考え方とは非常に重要な点になると思う。

【D】 題目受持の心持がまことであればある程、仏さまが恋しくなる。

【C】 しかし題目受持のみでは僧伽の中心が不明になってくる可能性は充分ある。

【F】 その場合の題目を理法とするか、教法とうけとるかによって、本仏との関わり合い方も変わってくる。

【B】 題目本尊ということに深い意味はあると思うが、お稲荷さんであろうと、他の諸尊であろうと南無妙法蓮華経と唱えれば本尊となるという受けとり方が、たしかに日蓮宗にはあると思う。一尊四士論はそういう現状を、本仏の人格性を立てることによって、矯正するという考え方があるのではないか。

宗教と呪術の違いは人格的なものが入るか入らないかによるといわれる、宗教は人格的なものが入る。呪術には入らない。呪術は機械的くり返しによって何かを得ようとするこの規定の仕方は多分にキリスト教的であるとは思いますが、本宗の現状にこれをあてはめて見ると、題目を口さきだけでたたくり返し唱えていけば靈驗あらたかであるとか、或いは題目を書いてうらないに用いるとかいう場合にはここには人格は感じられず、呪術的傾向がでてくる、という現状がもし認められるとするならば、人格性を出して行くということは非常に意味があると思う。

【G】 仏教ではダルマ（法）を重んじ、ダルマが人格化されて行くということがあるから、ただ人格だけを問題にするのは一面的ではあるが、人格性というものは要請される。

【B】 ダルマと本仏の関係はむずかしい問題で、これを論ずるとまた前にもどってしまうのだが……

【G】 宗祖が法華経、法華経という場合に法華経はダルマであるけれども、人格者でもあるので、「法華経に叱られる」とか「法華経にほめられる」という表現がある。「法華経の真実の致すところ」ともいう。

【F】 身延入山後ではことに微妙ですね。

【G】 法華経釈迦仏、釈迦仏法華経ということは始終くり返されている、ということは両者が一体であるということだと思ふ。

【B】 前にいったが、我々が釈尊というとき、どれだけ人格として感じているか、問題である。

【G】 その点では、Hさんは歴史上の釈尊をふまえるということを強調される。応身顕本をふまえて行くということです。

【H】 始即本ということが問題で、本仏釈尊といっても私達の直感でとらえた仏、いわばそれは法の上の存在で、それを規定するには歴史上の釈尊を通じてみなければ人格性は生じない。

【G】 宗祖は法華取要抄等で、四月八日を阿弥陀仏誕生の日にうばいとってしまったり、薬師仏誕生の日としてしまったとかいって非難している。そういう点、宗祖は四月八日がくると釈尊の誕生を追憶されている。久遠実成の釈尊からすればあまり重要でないかも知れぬが、その点、非常に具体的なイメージがあったのではないか。

【D】 もちろん寿量品の仏は応身釈尊を離れているわけではない。

【H】 法は仏の背景にあるもので、法Ⅱ仏ではない、日

蓮宗は本当の意味の釈迦宗である、ところが、日本仏教の他宗では、釈迦牟尼仏のとらえた世界を釈迦牟尼仏と切り離してとらえている。

【C】 釈尊の人格性を感ずる以前に、我々は宗祖像を本尊の前に安置して、宗祖を通して釈尊の人格も拝しているのではないか。

【H】 我々は、宗祖の心を通して拝するが、正宗などはその宗祖自体を拝するので、釈尊を不必要とする。

### 本尊奉安形式について

【F】 大体、今までのお話で、先生方の本尊についての共通の考え方がわかったと思われるがそれならば、本尊論争の問題であった形式をどう調整したらよいか、について意見を伺いたい。

最初のお話にてたように教団として、本尊をどのように考え、そして奠定したらよいかの問題である。今までのお話で大体本尊についての理論ではかなり集約されてきたと思うが、具体的に曼荼羅をどう説明し、木像をどういう位置におくかが問題となろう。

【D】 儀相の問題はやはり教団的に、我々の生活、感情に能所に適してすぐれた儀相を考えるのだから、各人各様

いろいろな形が考えられる、それをどういう風に統一していくかが問題だ。

【H】 しかし実際問題として、今の日蓮宗寺院はどういう形式で本尊をお祀りしているかも問題である。お曼荼羅だけの所もあるかも知れないが、大部分は何か木像をおいている。

【D】 一塔両尊は大体動かないところ、これはこれではないのではないか

【G】 私が学部長のときに地方を歩くと、日蓮宗の勧請様式を具体的にはどう統一したらよいかという質問を受けた。私はこれがいいといっても一概にすぐ直せまますかといった、今まで先師が奉安してきたお木像をかたづけしてしまえるか。またお曼荼羅を奉安しているお寺がお曼荼羅を焼いてしまってお木像にできませんかといった。これがよいといったって、感情の上からいっても信仰の上からいっても恐ろしくてできないんじゃないかといった。だから、私は異質的なもの、例えば、阿弥陀仏や稲荷などを祀ることは徹底的に破折してもよいけれども、一塔両尊四土でも、一尊四土でも、或いは大曼荼羅をそのまま勧請した形式であっても、それは本質的に問題のない本尊ならば、まずそれでいいんじゃないかと思う。



【H】 現状肯定ですね。ただ、今後、新しく作る場合は、宗祖の御真筆のお曼荼羅を模写したものを勧請される事が一番いいのではないかと。宗祖のお筆になるお曼荼羅を拝むのだから。私はそう思ったので新しくお曼荼羅を勧請したわけです。そして、その前に釈尊の立像をお祀りした。

【C】 そういう意味ではむしろ、一人一人に勧請様式があるでしょう。

【G】 統一してしまうことはむずかしい。

【F】 また、お堂の大きさとか、形態などで、いろいろ技術的な問題もありますし。

【D】 しかしお互いに盲点を指摘し合うことは大切だ。

【C】 ちょっと協道にそれますが、祖師堂が中央で、本堂が脇にあるのはよくないと思う。佐渡では勿論、後にできたものではあるけれども、いかに祖師堂を大事にしても本堂が中央になっているそうです。在家では、お仏壇にお祖師さまの像だけの所が多い。今、うしろにお曼荼羅をかけさせることをやっているのだが。

【G】 実際、祖師信仰の流れでやっているもので、それを修正しなければならない、分らせるために、形から入ることが大切だと思う。

【C】 信仰の内容を明確にきめておかないと、勧請の形式だけを論じていては、それだけのものになってしまう。

【F】 そうしますと、大体今までのものがあるところは、本質をよく理解させなければならないということ、今後、新寺建立の場合には宗祖真筆の模写の曼荼羅を中心に奉安して行くことがのぞましい、また、檀信徒にも曼荼羅を奉安させるべきである。という結論でよろしいでしょうか。

【G】 今の内局が、臨滅度時のお曼荼羅を宗定として奠定したでしょう。それはそういう意味もあるんじゃないんですか。教権的なものとして立てる必要がある。

【D】 ただその理論づけ、証拠づけは宗学者がやらなければならぬ。

【G】 そうですね。臨滅度時の本尊がよいですね。またそれに限らず宗祖の御真筆の模写がそのまま、美しくできる時代ですから、それを奉安することが一番よい。もちろん、釈迦仏造立、一尊四土造立もよいでしょう。

【F】 ただ、曼荼羅の理解を心ある人には伝えて行かなければならないと思う。

【C】 我々の信仰がどういうものを説いて行く説教の努力が必要である。ところが、そういうものがないところ

で、本尊を問題にしても、形式論に墮さざるを得ない問題点をもってしているのではないか、その点が大事なところではないか。

【H】 日蓮聖人は法華経を弘めることが第一義で、そこに本尊が奠定され、折伏が行われているわけですからね。それが後には主客顛倒して、拝むものばかりが問題になっている。

【G】 だから、そこに謗法意識というようなものがなくなってきた。

【F】 曼荼羅中心の儀相ということについて何か。

【H】 曼荼羅は基本で釈迦牟尼仏の心だと思ふ。心を教えるためには、曼荼羅が釈迦牟尼仏の心だと見えるように掲げておけば問題にならないと思ふ。創価学会はお釈迦様のかわりに日蓮聖人をもってくるだけだと思ふ。

ですから一般にいつて、宗祖真筆のお曼荼羅の模写——先程の話のように臨滅度時の曼荼羅がよいと思ふが——をかかげ、できればその前に釈尊のお木像を安置するのが一番よいのではないか。そういうようにすれば、信仰の雑乱が統一されるのではないか。(現状ではいろいろ形式が勿論許されると思ふが)

【F】 最後、本尊論に関連している／＼な問題が解明さ

れなければならぬと思ふが、その中でも、かつて天皇本尊論が時代の流れの中で、清水梁山師・高佐師・高橋善中氏らによって、主張されたことを記憶しておいてよいと思ふ。結局、曼荼羅の理解によっては、そういうあやまった理解がでてくることに、注意を払わなければならないと思ふ。

(了)